

主催：京都文教大学人間学研究所 共同研究  
「学園ミュージアムを考える」

公開シンポジウム  
「学園ミュージアムを考える  
—設立・運営コーディネーターを囲んで—」

第1部：講演「手づくりで大学博物館をつくる

—鹿児島国際大学の事例から—

講師 中園 聡（鹿児島国際大学国際文化学部教授）

第2部：共同討論「本学の学園ミュージアム構想」

宇治谷 恵、坂本 博司、杉本 星子、永野 貴子、中村 博幸

司会：上田富士子

開催日：2006年2月3日（金） 会場：京都文教大学普照館F232号室

中村博幸：今日は「学園ミュージアムを考える」研究会の第11回ということで、プロジェクトの総括をやっていきます。我々は学園ミュージアム、大学博物館を作ろうということで、これには、二つの側面がありますね。ひとつは学芸員課程があって、教育的な実習をやったりするための博物館。もうひとつは、京大博物館といわれるように、学校が持っているものを、いかにきちっと保存して、文化として伝えていくかという、こういう側面の二つがあると思います。それをどういうふうにしようかということが、我々の課題でありました。

それで、人間学研究所のプロジェクトとして始まりまして、いろんな人にお話をお聞きしました。例えば、外部の先生に限りますと、国立民族学博物館の吉田憲司先生に、今の新しい博物館の視点をお聞きしました。それから、「資料館の20年」ということで、宇治歴史資料館の坂本博司先生にもお話をお伺いしました。それから、新しい博物館の運営や管理について、キッズプラザの山田隆造さんにも話をお聞きしました。

そういう活動の中で、我々が思っていますの

が、大学博物館をどうやって運営するかということです。以前、博物館講座協議会というのがあって、その西日本部会が、今日こられている中園先生の鹿児島国際大学で行われました。その時に、開催校の大学でということで、博物館ができたので披露されたわけです。その時に私が感銘を受けたのは、手作りでいろんな事をされている。ひとつは入れ物の問題。博物館がはじめから大きなお金が入ってできるというのは、これは大きい大学でも難しいわけです。それを手作りされたということに、とても感銘を受けました。そしてもう一方では、入れ物やシステムだけでなく、学生さんをすごく育てている。私は教育もやっている人間なので、いろんな現場のウォッチングをしますが、そうすると、小学校の学芸員ごっこみたいに、しゃべるだけの学生さんがいるんだけど、質問したら答えられないとか、ちょっと応用が利かないとか、そういうことが多い。ところが、中園先生のところのパネルの発表があり、博物館を学生さんに案内してもらったんですけど、私が非常に意地悪な質問をしたというのに、みんな答えてくれる。これはちゃんと身になった教育がで

きているんだなということで、そういう事例としてよく話題になるのが、鹿児島国際大学であったり、それから大谷女子大学。ここも違った意味で面白いですね。それから、南山大学の博物館。これらが学芸員課程では面白いなと、そういうことを思っていました。それで、今日は夢が叶って、中園先生に博物館のお話をさせていただきます。

ということで、ご紹介するのが、鹿児島国際大学の中園聡先生です。肩書きは、国際文化学部の教授で、考古学のご担当で、考古学ミュージアムの施設長も兼ねておられます。中園先生は、博物館の学芸員課程の創始者だと私は思いこんでいたんですけれども、実はご専門が考古学でして、発掘をされていて、弥生時代がご専門でございます。

だいたい1時間くらいをお話をいただきます。その後ちょっと休憩を取りまして、簡単な質疑応答をやって、その後に司会を上田富士子先生にお任せし、ミニ・パネルディスカッションをやるという予定になっております。

それでは、中園先生どうぞよろしくお願いします。

## 第1部：講演「手づくりで大学博物館をつくる —鹿児島国際大学の事例から—

講師 中園 聡

中園聡：皆さんこんばんは。ただいまご紹介で過分なお言葉をいただきました。しかし、私もいろいろ悩みながら、ここまでなんとかやってまいりました。ところで、お互い様でして、こちらの京都文教大学の方がはるかに進んでいる面がどうやら沢山ありそうだというのが、先ほど先生方とお話しして、だいぶわかってまいりました。今日は、情報交換などを活発にやっていければと思います。また、先生方や博物館で活躍されておられる方も今日はおいでですし、また学生さんが来られているというのは、非常にいいことだと思っています。私の今日のお話何か皆さんのお役に立てればと思います。ど

しどしと厳しいご意見もいただければと思っています。

私は考古学が専門でして、弥生時代の土器とかお墓をやってきました。鹿児島国際大学は、元々は鹿児島経済大学といったんですが、2000年に新しく国際文化学部ができて、鹿児島国際大学と名前を変えました。新学部の設置に伴って、私は考古学と博物館学の担当ということで赴任したわけです。以来、考古学や学芸員の授業等をやりながら、また博物館等も運営しながらここまで来たわけです。模索の日々でした。私は、考古学は専門という自信があるんですが、博物館というのはいまいち微妙なところがありまして。実は、私は学芸員の資格を持っておりません。これを授業中に言うと、学生さんたちから、エーっていう顔をされるんですね。そういう私が、どのようにしてやってきているのか。ということを今日はお話したいと思います。

先ほど大学の組織に触れましたが、既存の学部として経済学部、福祉社会学部がありまして、国際文化学部が新しくできたということです。短期大学が引っ越してきました、同じキャンパスに短期大学部も設けられました。大学院も同じキャンパスです。博物館の施設は5号館というやや古めの建物にあります。1階の元々教室だった部屋を改造して、博物館活動と学芸員教育を行っています。坂道を一生懸命登っていきますと大学にたどり着きます。そこから桜島が見えまして、景色が自慢です。ぜひおいでください。

考古学ミュージアムの話ですが、2002年4月に学芸員資格課程が設置され、学芸員の実習を行う学生を初めて受け入れたわけです。3年生です。その時に博物館実習室を同時に開設しました。オープンには6月ですが、4月に建物は完成していました。この実習室が発展しまして、今の考古学ミュージアムになるわけですから、母体となる実習室をどうやって立ち上げたかをお話しないといけません。

実は、こちらでの長期間の取り組みとは違ひまして、うちは不真面目で、ある日突然そうい

う話になりました。こういうのは、大学の中でいろいろと交渉して、という過程が入るんですけども、あまりそういうのがなく、こちらの要求と大学側の判断とがタイミングよく合致して、すんなり上から下まで話が通って、ある意味、降って湧いたような話でした。

私が着任したのが2000年4月で、翌月いきなり発掘をやったんです。その時の発掘の報告書が、本日回覧されている『屋久島横峯遺跡』という本です。おそらく九州の縄文時代の遺跡としては、住居の数が一番多い遺跡です。そういう重要な遺跡を調査することができまして、地元の屋久町との間の共同事業として一月ほど掘ってました。それが話題になりまして、毎年掘りました。当時国際文化学部の学生は最上級生がまだ1年生でしたが、最初の2年間で興味を持つ学生も少しずつ出てきました。調査の成果が新聞やテレビで報道されますので、大学の経営的にも利点があったでしょう。また、そこから出てくる土器やら石器やら大量の資料をどうやって保管したらいいかという、差し迫った問題も私たちにはあったんです。

その資料を大学当局にお願いして、空き部屋に置かせてもらっていた状況でした。そして何か簡単な展示ケースが一つでも二つでもいいからあったら、展示もできると。置き場所が一番心配だったわけです。やはり文化財ですから、いくら地元に戻すといっても、それまではきちんと整理・管理しないといけません。そうしてタイミングよくいろいろな条件が重なって、じゃあ、展示施設を作ったらという話になったようです。学部ができて、まだ2年経ってない段階でした。非常にありがたいことでした。

大学当局から、予算案と、設計のための見取り図を作れといわれました。私は設計図は描けませんし、予算も事務が直接やってくれるわけでもありませんので、なかなか難しい。しかも私自身が博物館なんか作ったこともやったこともないんです。非常勤講師で、他大学で学芸員の資格関連のコマをひとつ、古美術研究というのを教えたことがあったくらいです。学生時代に資格は取っていないとはいっても、学芸員資

格の授業はかなり受けていました。そういうことでありまして、手探りで何とか作らないといけないという羽目になりました。

当時、私は助教授で、もう一人、年配の大先生、考古学の先生です。この方は博物館の建設事業に関する実績はあったんですが、やはり、自分で作ったことはないのですね。ふたりでちょっと悩みました。そして、実務を私がやったのです。2001年11月頃から、大量のカタログを取り寄せまして。博物館で必要なフック、ワイヤー、ピンとかの細かいものから、大きな展示ケースとか、博物館専用の脚立とかを調べました。喜びの涙なのか何なのかわかりませんが、泣きながらカタログと格闘しまして、どこが安いとか、膨大なリストを作りました。いくら手づくりでも施設自体を改造して備品もいますから、安からぬお金はかかるわけです。そういうお金を昨今、どこも財政が厳しい状況ですけども、大学が出せたというの、そういう余力と戦略的判断があったからだとは思いますが、それに加えて学部ができて2年目で進行中といいますか、予算をつぎ込める状況にあったんじゃないかとも思います。改組とか大学院の立ち上げ、そういうときが一つのチャンスではないかという気がします。

こうして、展示室、整理作業室、収蔵室の3室を設けることにしました。数十人入る教室2つを改装して3つにしないといけないんです。1つの部屋を仕切って、一番狭いところを展示室にしました。収蔵は重要ですが、でも本当に大事なものは整理作業室ですね。やはり、学生が集まって作業する部屋ですし、展示業者に頼むと、なかなか高いんです。契約すれば、丸投げでもデザインから展示まで全部できますが、大学はそこまでは金を出せないでしょうから、こうなったら手づくりでやってやれ、と。工事の業者も、博物館は始めてでした。設計者もそうです。「手づくりでやる、しかもその割には高度に見えるように」をコンセプトに、きっと苦勞するだろうとは思ったんですけども、あえてやってみたかったんです。

まだ私のゼミに学生はいませんでした。まだ2

年生しかなくて、うちは3年生からゼミに所属するんです。そこで何人か学生に声をかけたら、「興味ある。やろう!」と、ノリがよかったんです。そういう学生を集めて、口コミで広がったりして、先生よりも学生が集まってくれました。やっぱり、やってみようという人は出てくるものですね。床の色は何色にしよう、床は光沢があったら反射してよくない。でも、完全にマットにするわけにはいかない。カーペットにすると汚れやすい。掃除も大変だし、頻繁に床を張り替えることもできないだろう……。ああでもない、こうでもない、ない知恵を出し合いながらやりました。

11月から工事を開始して4月に完成。6月には展示までできてオープンですから、めちゃくちゃなスケジュールです。それをあえてやれたのも、学生のおかげかもしれません。学生さん、先生に協力してあげたら、先生がもっとやる気になりますから! そうすると学生も面白い。大学が作ってあげた施設で、しかも展示までできちゃって、はい、実習してください、ではなしに、最初から作っちゃえ、と。作るのに関与して、だんだん私は気づいたんです。あ、これは学生が自ら考えているな、と。まだ学芸員課程で実習をする直前なんです。この延長が実習だということに気づいたんですね。博物館の立ち上げなんて滅多なことでは携われないですから、学生にとっても重要なことだと思います。また授業でも使えるなと思ったので、その立ち上げの過程を工事の最中から記録したらどうだろうと。そこで、私が講義でいない時も、学生にへばりつかせて写真を撮ってました。最初からそうやって出発しましたので、この実習室は、学生が考えながらやっていく場だと。自然の成り行きかもしれません。これで、できちゃいました。

そして2年後の2004年3月に、博物館に併設して小さな事務室を作りまして、博物館相当施設の認定を受けました。名前も、博物館実習室から「国際文化学部博物館実習施設 通称考古学ミュージアム」に。博物館というのは全国にあります。実習施設という所はまずなく、その

特徴はうたっておきたいということです。その段階から、実習助手というのをおきまして、1年更新なんですけど、学芸員。考古学の専門の人です。それから臨時職員として事務員を一人おきまして、今は2代目で大学院生が兼務しています。

2004年度より、考古学実験室・測定室を開設しました。100名規模の教室を改装して3つに仕切って、その一つを博物館事務室としたんですけども。こちらの方は、成り立ちが違って、科学研究費・基盤研究(S)というのを受けて、これは純粹に考古学の研究のためですけども。その間接経費と大学の経費とで整備されたものです。ドアを開けたら事務室につながる構造です。ここも学生さんが使っています。

考古学ミュージアムの施設は、まず展示室。隣に整理作業室、廊下を挟んで向い側に収蔵室。そして事務室がある。実習室の設置時点に戻りますが、2002年3月に改装工事が完了して、展示ケースや機材・備品を搬入しました。泣きながらリストを作ったやつが到着して、工事が始まって備品が入りだすと、これはやばい、早く写真撮らなきゃと。未だにそのときの記録は授業で使っています。もう二度と撮れませんからね。計画段階からの学生の協力のおかげで、またとない機会でした。奥のウォールケースは、探した中で一番安かったんですけど、コンコンと叩いたらいかにもベニヤという音がします。そういう市販のやつを改造してくっつけて使っています。人が入ると狭いです。部屋も狭いので、しょうがないんですが。

私は、イラストレーターのソフトを使って一生懸命見取り図を書いたんです。いかにも本物の設計図みたいにして。好きなんですねこういうの。すると事務の人がすごく感動してくれて、この先生なら大丈夫だろう、と。そういう信頼感を得るというのも実は大切です。こういうのがお得意な学生さんは、もし将来こういうことになりましたら、是非協力してあげるとよろしいんじゃないかと思いますね。これは私が作ってしまいましたが、配置とかは学生と話し合いながらやりました。

整理作業室は博物館の準備室みたいな所です。視聴覚機器を使用した実習もできます。ここで土器の図面の描き方とかいろいろやります。後ろ半分は黒い天井の写真を撮るスペースです。これは、本来は別の部屋にあるべきです。しかし、使う時は遮光カーテンを引いて使う。ふだんは、カーテンを開けて机を置いています。これは苦肉の策で、十分なスペースがないですから。洗い場もありまして、出土品の泥が流れても大丈夫なように沈殿槽があります。そこに遺跡の土を洗って、古い種子とかお米とかを見つけるウォーターフローテーション装置もあります（資料1）。

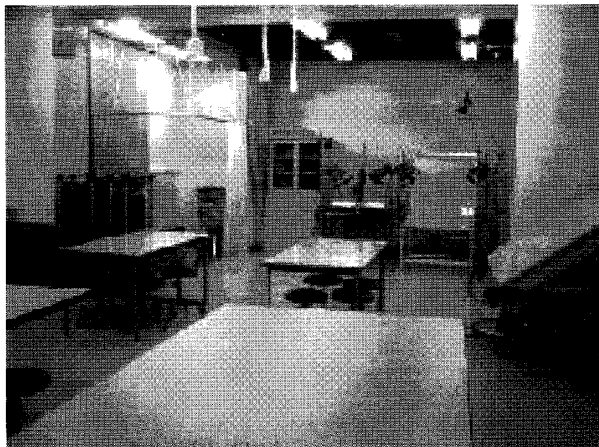
その部屋で、学生が土器の復元をしたり、土器の表面を板でなでて刷毛目という筋の復元実験をやっていたりします。標本を切るときは、最近の実験室にドラフトチャンバーという埃を吸い取る装置があるんですけども、その時はなかったんで、ホームセンターで2500円くらいで買ってきたカッターで切っています。展示に使うパネルも、自分たちで画像処理して作ります。コンセプトは「手づくり」です。ホームセンターと仲良しになりました。でも、すごいお金を使うわけではありません。みみっちく買うんです。プリンタ用の市販のA3の光沢紙に、普通のインクジェット・プリンタを使ってプリントしたのですが、意外と見栄えがするんですね。こういうのをやらなきゃと目的がはっきりしていると、そういう風にして、やらざるを得なくなる。すると自然とコンピュータの画像処

理まで学べるわけです。ほかに、ホームセンターで買ったアクリル板を一生懸命カッターで切って、綺麗に整えて、展示品の解説のプレートを作ります。銀色のシールになっているプリント用紙に、カラーで印字して、それを貼り付けると綺麗なんですね。これだといつでも交換できて、間違っても惜しくないです。

つい最近も、甕棺という、弥生時代に人を埋葬した大きな土器ですが、その甕棺の蓋を載せる展示台を、学生と二日ばかりで作りました。パネル板と角材と釘を買ってきてまして、普通の白っぽい壁紙を貼るとすばらしいです。実は私も展示台を作るのは初めてでしたけど、大きくて結構立派です。持ってきて見せたかったくらいです。すいません、専門の人に言わせると、バカな話と思われるかもしれませんが、手づくりでできるんですね。キーワードは「柔軟性と手づくり」です。

柔軟性という点では、展示室の配色も考えました。あえて壁は白っぽいグレー、それから展示ケースは濃いグレーに。面白味がないですが、様々な展示にこたえるようにしています。あと、天井のフックをかけるレールですが、梁や柱のちょっとした出っぱりにも沿ってつけています。将来どんなことでもできるようにするため、そういう所も意地で作ってみました。学生は我々より柔軟な頭を持っているので、斬新な展示法への配慮です。

学外の施設で実習をやる利点はあるんですね。しかし、館によって内容が違ったり、あま



資料1 整理作業室



資料2 展示室の天井と照明

りやる気のない館もあつたりしまして、具体的に展示を企画するとか、照明を触らせてくれるとか、そういう所がありません。しかしここでは自由にできます。展示ケースなども安価ですがいずれも本格的なものです。天井の照明も博物館用の紫外線カットのものを採用しています。可動式で脱着が可能です。展示室内にむき出しのパネルで、いろいろのつまみで照明を変えるようにしています。普通なら隠すところですが、あえてむき出しなのは実習のため……ということにしています（資料2）。いろいろ予想外の利点、後付けでやってよかった、というのがあります。壁面には自動開閉のシャッターがあって、自然光が取り入れられるようになっています。窓は消防法だかなんかで塞いじゃいけないんですよ。もともと教室ですからね。

中村：入り口と出口が必ずいるんですよ。

中園：塞いじゃ駄目ということで、工事の人と相談しまして、開閉シャッターを付けちゃえと。普段は閉めておいて、シャッターさえ開ければいつでも自然光が採り入れられます。シャッター部分は、枠を作って普通のクロスが貼ってありますので、普段は普通の壁。これも苦肉の策です。

これが最初の展示で、一角は「屋久島横峯遺跡」の速報展示コーナーです。あとはメインの弥生土器の展示等で、オーソドックスな展示ですが、弥生土器の製作技法がテーマです。実はうちの施設のすぐ近くに鹿児島市立のふるさと考古歴史館という考古学の博物館があって、うちのほうが小さくてしょぼいわけです。それで、どうしよう、困った、となる。そこで、大学だから、教員の研究や学生が卒論なりゼミなりで研究したことを出していければ、それが特徴になると考えました。大学として研究をやるからには、一般に公開できればすばらしい。当たり前ですよ。内容的に難しい展示にも、あえて挑戦する。難しいことをいかにやさしくできるか。小さな施設なので、来館者には解説を



資料3 ウォールケース 最初の展示



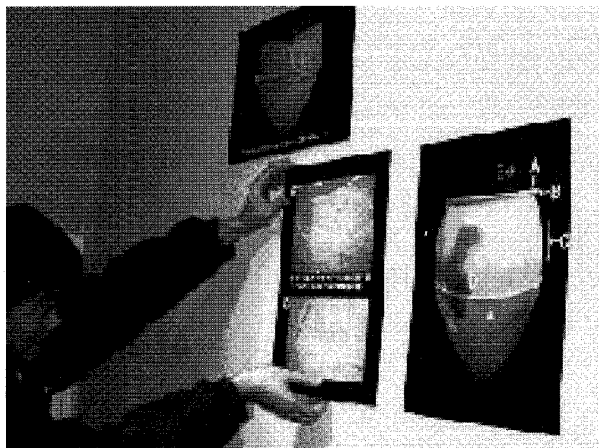
資料4 展示パネル



資料5 展示室 特別企画展

することもできますし。質問にはいくらでも答えられる。説明には、学生の協力も得ています。質問を受けてこそ勉強になり、実力がついていくと思いますね（資料3）。

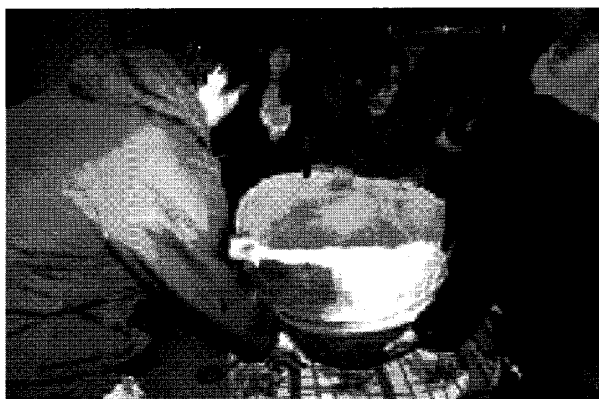
パネルとかも、全部学生がパソコンでチクチクと作ったものです（資料4）。開設時の総展示



資料6 館務実習 展示替え



資料8 実習風景 植木鉢を使った実測



資料7 館務実習 甕棺の運搬

費用、たったの8万円でできたんです。ホームセンター泣かせといえますか。ホームセンターから表彰状もらってもいいくらい通ってはいるんですけど。あと、ケースの外に展示するスペースもありまして、照明ひとつで見え方が全然違うんです。

(資料5)は、特別企画展「過去と現在のかけ橋―土器作りの民族考古学―」です。アメリカの1960年代に出てきたプロセス考古学という理論派の流れをくむ、ややこしい考古学なんです。それをいかに易しくするか、頑張ってみました。研究めいたものをあえて出すという所が、大学ならではの特徵と思っています。ただでさえ理解の難しいものを易しく言えるようになって、それを高校生とかに解説できるっていったら、学生さんも相当わかっているということです。人に教えられるというのは、自分の理解度を知る一番の指標ですからね。私はタイで現代の土器作りの民族調査もやってるんです

けど、普通に土器を置いたら面白くなかった。民族っぽさや生活感がないんですよ、綺麗に展示すると。だから、タイの新聞で展示台を作ったり、遊んでみました。

博物館実習Ⅰが館務実習です。2004年から学内で館務実習をするようになりました。それ以前、2002、2003年は学外でしました。事前指導で県内の3～5館を見て回ります。館務実習の後は、事後指導を兼ねて県外の2館程度の大きな博物館を見ます。学内での実習はフレックス制で、期間を区切らずに、いつでも来ていいと。博物館の年間業務を提示しておいて、やりたいところに出る。好きな時にフラッと行けるから学生の評判はいいのですが、教える方は大変です。ばらばらに来るんですから。というわけで、学芸員の協力を得て、はたまた大学院生の援助も得て、なんとかこなしています。これは展示したり、甕棺運んだりしています。「そういう持ち方は駄目」とか怒られながらやっているところですね(資料6、7)。

博物館実習Ⅱは、土器の図を描く、写真を撮るなどの技術の修得が主です。これもホームセンターから一個80円の植木鉢を買ってきてまして、これで実測図を描いたり。みんな同じ条件で測れるんですね。うちの大学は現物資料が少ないんです。本当は、ちゃんとした土器を実測した方がいいんですが、苦肉の策でやってみたら、意外とよかったんですね(資料8)。最近はタイの民族資料とかも、段階的にやっております。実測道具は自前で用意してもらっています。



す。本当は大学でガバツと用意できればいいんですが、それは課題です。

また実習の一環で、野外調査として大学のなかを歩き回って土器を拾ったりします。よく見たらあるんですね、うちの大学。桜島の近所ですから、火山灰の層が大学の中の随所にあるんです。ここにあるのは何という層か、といったことは知っておけ。鹿児島中どこへ行っても、ヒーローになれる、カッコいいぞと教えるんですね。そういう活動もしています。

来館者への展示解説もしています。開設当初から関わっているある学生は、修士論文を今度出しましたが、なかなか優秀で、解説の名人です。活動を通して大学院にも行く気になりました。彼女の言葉では、「私は昔、馬鹿学生でした」と言っていますけどね。意識が芽生えてきてやる気になって。将来は研究者を目指しています。そういった教育効果もあると思っています。また、外国の人も来て、英語の勉強にもなっています。京都は結構外国の人多いですから、いいでしょうね。

教員の研究のポスターもあります。学会で発表したやつとか、学生の卒論研究とかの展示です。学会発表とかをやりたい学生には、どんどんさせますので、それをまたここで展示したり。他の人にも見てもらえますし、自分で解説もできますからね。これが意外と評判いいんです。通りがかってじっと立ち止まっている先生とかもいて。学生も見て、そうか、こういう風に卒論とか書かないといけないのね、みたいに言ってる子もいたりして。いい効果がありますね。サイズが大きいので業者にプリントを頼んだら1万円とかするかもしれませんが、実はA3の光沢紙を貼り合わせてるだけです。意外と見栄えがします。

日本の博物館は高校生が一番少ないと言われますが、高校生はよく来ます。学校から行って来いといわれたり、あるいは大学のオープンキャンパスみたいな時に、高校生がよく来ます。そういうときには、土器をくっつけてみたりとか、体験してもらいます。これは本物の土器だよ、3000年前に本当に使っていた土器なん

だよという、たいてい感心してくれます。考古資料のひとつの強みです。この時だけは、初心者の学生もいかにも専門家ぶって解説するんですね。高校生もはまって、ずっと居座って。ほかを見学しなくていいの君たち、とこっちが心配になるぐらいです。

砂丘遺跡の砂をふるいにかけてたら、大量に砂が余りまして、その一部をここで使っています。ホームセンターで安売りしてた水槽を買ってきました、中にのりを入れて固めて、竪穴住居や古墳の模型を作りました。地層も作ってるんですけど、違う色の土が埋まっていて、その色が違うところを掘っていくと、柱が掘れるんだよ、なんていくら言ってもわかんない。じゃあ掘ってもらおうと。学生と作っていたら、いろんな学生が面白がって来て、粘土で人形作り出した人もいれば、レベルとか測量する時の平板とか、ちゃっちゃと作る人もいたりして。みんな活躍できるんですね。

小・中・高校の先生の十年目研修というのもあるんです。研修の一つを私が担当してまして、考古学と博物館というテーマです。うちの施設でも体験してもらいました。小学校の先生たちに水槽のジオラマの発掘をやってもらったんです。いい年してきゃあきゃあ言いながら、掘ってくれまして。キャンパス見学会とかでもウケます。子供だましみたいですけど、発掘の本質を突いていると思います。

大学に生涯学習センターというのがありまして、その活動の一環として指宿市との連携の講座があります。指宿周辺の人たちが大学に来たり、こちらが指宿に出向いて講演をするのですが、歴史好きの方々が来てくれます。本来、教員が講演した後に博物館を見学してもらえば済むんですが、学生が手伝ってくれまして。動物の生態をやっている学生なんかも集まってくれたりして、教員だけよりも大きな効果があります。参加者も若い人と接して嬉しくてしょうがないんですよ。学生も、おじいちゃんおばあちゃんくらいの世代の人とも接して、面白いらしいですね。質問されて、それに答えて、わかってくれる。そのやり取りが双方とも嬉しい





資料9 学生による展示解説

みたいですね（資料9）。

教職員と仲良くするのは重要なこと。キャンパス見学会とか、大学を開放する行事には、ちょっとダサいんですが緑色のはっぴを着て事務の人が参加者を案内してくるんです。参加者はもちろん、普段疎遠な部局にいる職員にも知ってもらえる。学生の説明を聞いてるうちに説明を覚えてしまって、自分なりにいろいろアレンジして、自分が説明するから、という教員もいるんですね。非常にありがたいことに、そういう人たちがサポートしてくれるんです。だから事務職員や教員たちと仲良く、その人たちも喜ばせながら、みんなで盛り上がっていく。盛り上げるというのは大事で、やっぱり苦労話ですね。この箱作るのにどんなに大変だったとか、いろんな苦労話をして共有していく、情報の共有というのが大切だな、と。

画像処理は、フォトショップ、イラストレーターというソフトを使い、最終的にクォーク・エクスプレスという編集ソフトで作ります。だから、芸術系の学芸員になりたいとか言う学生も、こういうのを通じてのめり込めますね。学芸員は、何か得意分野があると必ず活かせるものだと私は思っています。

最近できた実験室は、学生もよく出入りします。測定室に蛍光X線分析装置がありまして、土器などの成分が測れるようになっています。こういう高級な装置は科学研究費で買ったものですが、ただ私は欲張りですから、学生を見学させたり、測定試料を調整する時に学生と一緒にやるようにしています。発掘調査もたま

にやりますが、残念ながら学芸員課程全員でやってはいません。特に考古学のゼミ、今は三つありますが、そこに所属している学生や大学院生が主です。しかし、考古学を専攻する人たちは学芸員資格を取ります。

中村先生もおいでになった、全国大学博物館学講座協議会の講演では、ポスターを学生が解説していました。学生は初めみんな尻込みするんですけど、「いやいやできるよ」とか言ったら、じゃあとか言ってやってみる。やったら自信がわいてきてやる気になる。だから教育と研究がリンクしてくる。こういうサイクルでやってきた学生の大半が大学院へ進学していったり、いろいろな効果が出てるという気がしています。中にはこの間、世界考古学会議というので研究発表した学生もありまして、もちろん英語で発表する。そしてその国際学会で最優秀ポスター賞というのを受賞しました。これをまた、大学に帰って言うんですよ。そうすると、直接関わらなかった学生もみんな喜んでくれる。アットホームな大学なんで、うちの大学も捨てたもんじゃない、自分も頑張ろう、となる。まだ日は浅いですが、教育効果は出てきているという気がしています。

今日はだいたい建物や部屋の話とかもしましたが、私いつも学生に言っているんですけど、箱や物よりもやっぱり学芸員というのは「人」だと思います。だから、手取り足取りパソコンの触り方から教えたり、私の仕事ではないといってしまうえばそうなんですけど、それじゃ駄目なんですね。それで効果が上がるとやっぱり嬉しいですね。どうか学生さんたち！先生は学生が育ってくれるのが一番嬉しいんですから、先生を喜ばしてあげてください。そうすると、先生は学生のためにもっと頑張ってくれる。ここで信頼関係も、より出てくるということがあるような気がしてるんです。

柔軟な発想と研究のできる学芸員養成を目指しています。当初からそうでしたし、だんだんその意識は増してきました。学芸員は高度な専門性も必要です。うちでは考古学を中心とした教育研究で特徴づけようとしてるんですが、も

ちろんそれ以外の芸術系、自然系の分野に進みたい人もいますね。でも、考古学の場合、フィールドワークもあります。中での仕事も、研究もあります。それに画像処理や、写真、保存や復元の作業もあります。一通りできるから考古学を中心にしてるんだと、公には言っています。ただ悩みとしては、学生の専門分野によって意識の差があるということですね。考古学とか関連分野に興味がある人はいいますが、それ以外の人はどうするかというのがあります。しかし、動物とかやってる人でも、のめり込む人もいます。実習受けている学生がみんな、もっとやる気になって、そして我々教員も喜ばしてもらいたい。そうするためにはどうしたらいいかが目下の悩みですね。それから、博物館相当施設になりましたので、義務がいっぱいで、定期刊行物を出さないといけないとか、いろいろあるんです。そういうのをクリアするのは意外と大変です。

また、学芸員がおりますが、学芸員そっこのけで自分が解説をする、という学生がいる。これが非常に大事なことですし、今後もその方針だけは貫いていきたいと思っています。だから、学芸員や教員は、でしゃばらずに、後ろで「うんうん、よしよし」と。私がついてるから安心して何でも喋れ、とってあげたいです。

だから、博物館相当施設になってよかったのか、まだわからないんですけど、内心ひそかに困ってたんですね。遡ってみますと、当初から降って湧いたような話であったとか、展示しろとか言われても資料がないとか、いろいろあったんです。でも、何とかそれを頑張ってクリアしてきたわけです。常に禍いを転じて福となしてきたんだと。だから、どんな大学にも博物館にも、もっと予算があったらな、もっと場所があったらな、などと不満はいろいろあると思うんですが、そこをあえて福となす。窓がどうしてもつぶせないけど、それはわざとやってるんですよという、そういう発想でちょっと変えてやっていく。そういうことがいかに大切か。またそれを私自身じゃなく、学生と一緒に

考えて、「あっ、そうだよね、こういう風なやり方ができるよね」というのを今後もずっと続けていけるかどうか、というのが悩みのひとつでもあります。そういうことで、ちょっと時間をオーバーしたかと思いますが、私の話をとりあえず終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

中村：ありがとうございました。休憩後に第二部のほうに移りたいと思います。

## 第2部：共同討論「本学の学園ミュージアム構想」

上田富士子：では、中村先生に代わりまして、私上田富士子が司会をさせていただきます。第2部の共同討論は、「本学の学園ミュージアム構想」というタイトルですすめていきたいと思っています。

簡単に説明いたしますと、この「学園ミュージアムを考える」というプロジェクトは、本学には人間学研究所というのがあります。その共同プロジェクトがいくつかありまして、そのひとつとして立ち上げたものです。私は、本当に恥ずかしいんですけど、博物館といったものについての知識が全然なかった人間でして。その私が代表者の一人になりましたのは、私が本学の新カリキュラム検討委員会の委員長をいたしまして、その後、学科長をいたしておりました当時、どうしても、本学に学芸員の資格を置きたいということで、中村先生や杉本先生と話し合っていたんですね。全く知識のなかった私が学芸員資格設置の責任者の役にいたということがひとつあります。

それと、京都には博物館が大小あわせて160くらいあるんですね。で、そのうちのいくつかを訪ねた時に本当に面白かったです。私がこんなに楽しめるんだったら、学生の皆さんも楽しめるんじゃないかと思って、これは絶対そういう養成課程を作るのには意味があるなと思いました。そうやって、何も知らなかった私が皆さ

んのお力添えを得て、作りまして。実際その後募集をしましたら、多くの学生さんたちが履修してくださいまして。だいたい単位取得は、すごく厳しくしてあるんですよ。ひとつでも単位を落としたら、実習科目履習は駄目だとか。そういうなかで、40名前後の学生さんたちが毎年資格を取得されまして、大変嬉しく思っています。

それで、じゃあ本学にも何かミュージアムを、ということで、学園としてミュージアムができるんじゃないかと考えたのですね。本学には人間学研究所があるので、そこで、まず構想を練ってみようというので集まったのがこの「学園ミュージアムを考える」という共同プロジェクトでした。最初、中村先生から紹介がありましたように、大学の内部だけでなく、外部からもいろいろ来ていただいて話をさせていただいて、3年目に入り、今日が最後となります。そこで、何か学園ミュージアムの構想として出すことが出来たらと思ひまして、今日はそのような試みのもとに、手づくりで大学博物館をずっと作ってこれられました中園先生を是非お呼びしようということで、来ていただいた次第です。本当にありがとうございました。ずいぶん参考になるお話をさせていただきました。モノ、ハコよりもまずヒトだという先生のお話に、感動いたしました。まさにそうだと思います。

これから共同討論を行う前に、4名の先生方にお話を5分ずつしていただきまして、それから、皆さんでお話をさせていただきたいと思います。最初は、本学の文化人類学科の先生でいらっしゃいます永野貴子先生に話していただきます。永野先生は、特に教職課程の方を担当していただいています。100周年をこの学園はむかえていまして、建学記念館というのが、本当にまだ構想の段階で、名前も正確には決まっておらず、仮の名前だと思うんですが。まずその建学記念館の構想について話していただきます。次に、坂本博司さんに話していただきます。坂本さんは宇治市歴史資料館の学芸員をなさっております。いわゆる地域の歴史資料館と、そこからみた大学との関係ですね。そういったこと

についてお話していただきたいと思います。それから宇治谷恵先生に話していただきます。宇治谷先生は、国立民族学博物館をはじめ、大きな研究施設とか、いろいろと世界的な展示をしている博物館と、大学の学園ミュージアムみたいな構想。そういう大きな博物館の視点から話していただきたいと思います。最後に杉本星子先生に話していただきます。杉本先生は、本学の文化人類学科の先生でいらっしゃいます。特にインドを中心にして、皆さん記憶に新しい「インド サリ―の世界」展（国立民族学博物館）を企画なさったんですが、そういった観点からお話をさせていただきたいと思います。

では永野先生お願いいたします。

永野貴子：では、一番最初に私のほうから。前回のこの研究会の方で、「次代に繋ぐ百年の蓄積」ということで、学園資料館に望むことという形で話をさせていただきました。もう2006年になりましたので、正式に言うと、去年、おとしになります。2004年に本学園が創立100周年を迎えました。そこでご縁がございまして、そこにいらっしゃる佐々木昭道さんなどと、幼稚園から大学院まで抱える、この京都文教学園の100年の歩みを『京都文教学園の百年』という百年史として編集をさせていただきました。その過程で、学園本部の構想もあり、学園記念館とか資料館みたいな形で、100年の歩みをひとつのベースにした資料館を、岡崎公園の平安神宮のそばの、岡崎キャンパス法人事務局の建物が、空き家になっているので、そこに作ったらどうかという案が出ました。

しかし、先ほど中園先生もおっしゃっていましたが、予算とかいろんな問題がございまして、なかなかその構想というのがあっても、鹿児島国際大学のようにパッと動くんじゃなくて、これは京都の歴史でもあるかもしれないかもしれませんが、熟成させてからでないとなかなか出たり入ったりして、良いものが生まれないという面もあるんですが。是非そういうものを作っていただけたらという思いと、学園の百年の歩みのなかには、このようなすばらしい資料、または

遺物、遺品等があるのだということをご紹介させていただきました。

本大学の中央のロータリーのところに胸像がありますが、大島徹水という方の像なんです。その方が3代目の校長だったんですが、なかなかの名僧だったんです。たとえば自分がお参りに行ったり、いろんなところにお話しにいったお布施を、自分は下駄の鼻緒がなくなるまで、タオルは網の目になるくらいまで使って、一切自分のためには使わないで、全部貯められたんです。そのお金で、実はもう廃校しようか存続しようかどうしようかと思っていた学園を建て直されて、今の岡崎の土地を買って学園を作られたというんです。その大島先生が、交友なさった学者や有名な名士、例えば内藤湖南だとか、西田直二郎だとか、富岡鉄斎だとか、東郷平八郎だとか、そういう方々との交流の遺品とかいろんなものもあり、名僧でもありますから、ご本人の墨蹟等もたくさん、立派なものとして残されています。しかし、散逸しているものもあり、もう風前の灯じゃないですけど、紙類は虫に欲しいままに食われていきそうな状況でもあります。そういうものをせめて残すという形ででも、まずはひとつの杭を打って、柱をここに将来立てるといような、しるしでもいいですから、そういったものを作っていただきたいということで、実は学園側をお願いしております。それがもし、うまく、ひとつでもワンステップとなれば、そこからまた広がっていくものがあるんじゃないかなと思っているんです。

これはひとつの学園全体のことでありますが、もうひとつ私は縁があって、こちらの方に三年前に寄せていただいて、文化人類学科の、博物館学芸員課程の一コマも担当させていただきました。実は私も35年ほど前に博物館の学芸員の資格を一応取っております。中園先生の先ほどの御本に書いてありましたように、私も発掘調査に行き資格を貰いました。紀ノ川のたまねぎ畑の下を発掘していました。で、そういう経験というのは、今でもよみがえってくるものがあります。ですから、文化人類学科という学科

があるということは、皆さんが人との交流、フィールドワークのなかで、それこそ発掘なものが沢山あるんじゃないかなと思います。いい資格課程がおかれていると思っておりますので、是非あそこの7号館に、たくさんの宇治関係の資料もお預かりさせていただいているということです。ですから、ひとつの学園の杭が打たれて、柱を建てようということになれば、すぐにきっとこの宇治のキャンパスでも、先ほどの先生のお話に触発された学生さんたちを中心に、こちら側にもそういう実習室などを作っていくという企画もまた高まっていくんじゃないかなという風に思っています。というわけで、学園資料館を是非実現させたいという風に念願しております。以上です。

上田：ありがとうございました。ご意見なりご質問は後にいたしまして。次に、坂本さん、お願いいたします。

坂本博司：宇治市歴史資料館の坂本でございます。この京都文教大学は宇治地域の中で言いますと、北辺とっていいところにあります。当方の施設は宇治地域で言うと、南の端っこであります。ですから、本当に離れた場所にあるんです。京都文教大学は市内唯一の大学でありますし、博物館の学芸員課程を設けられて、その学外の実習受け入れ先として真っ先に本館が候補に挙がるということからお付き合いが始まります。6年くらい前になりますでしょうか。そのあと、文化人類学科の橋本先生を中心に、「地域まるごとミュージアム」という共同研究が始まりまして、お誘いを受けまして、一部を分担しております。

今日ここに来ております、学生の概ねは広くいえば「地域まるごとミュージアム」にかかわりを持つ学生で、いわゆるオーソドックスな博物館の形からは入っていないわけなんです。ですから、かえって今聞きましたような話、まあこれは理想系理念系というか、ひとつのいいパターンに接することができてよかったと思います。ちょっと話を戻しますと、「地域まるごと

ミュージアム」の共同研究と同時に、この「学園ミュージアムを考える」研究会がはじまりました。ほとんどの会に出させていただきます。確かに今日の話などを聞くと、いかにも大学博物館のひとつの成り立ちとして、事例としてふさわしいものだろうと思います。発掘からスタートして、物がまず目の前に現れて、それがひとつの話題を呼ぶ。当然ながらそのものをどうするかといったら、場所が要る。施設がいる。同時に新しい大学の学芸員課程のスタートと絡まりあって、瓢箪から駒というか、棚ぼたと言うか、うまくタイミングがあって、考古学に特化したプログラムを作成し実行できるだけの力量をもたれた先生がおられた。手作りとおっしゃったけども、確かに手作りではありませんけども、もちろん綿密な計画というか非常にきちっとしたプロセスをふんで、段階的にできたものだろうと思います。驚くべきことはそれが非常に短期間に出来上がり、成果を挙げたということです。それと同時に、教育の面でも、効力を発揮しておるといふ。

話を聞いてまして、私が、大学で偶然博物館の課程をとり始めたころ、それから20数年前に、資料館を立ち上げて活動を始めた頃の状況とのギャップを今さらのように痛感しています。私は残念ながら考古学の専攻ではないんです。文献の方なんですけれども、まず20年前では考えられなかった状況で博物館が出来上がってきている。コンピュータを使った状況と言うのは20年前には絶対ありませんので。その意味でもある種のショックを受けてます。自分自身もパソコンを使って仕事をしています。今おっしゃったことと言うのは、僕はそう得手ではないけれども、周りでそれが進行していることはよく理解できます。それと同時に、その驚きの中で学芸員という意味、内容もずいぶんと変わってきているし、多様性を持つようになりました。これも当然なんですけども。その一例、端的な例が、考古学系の学芸員が今示されたものだと思います。本館は歴史資料係という文献を中心にしたセクションだけであったところに、そこに文化財保護係が合流すると言う、全

国的に見ても異例な組織をとっております。この話を同僚の、文化財のものが聞けばどう思ったか。ある種彼らにとっては、これは理想の世界なのかもしれない、言ってみれば、博物館とか考古学ミュージアムという名を借りながら、考古学研究室を拡張している事業でありますので、ある意味これは楽しく聞けたのではないかなと思います。

それでは、またここに戻ってですね、学園ミュージアムですけれども、ここで取り上げているテーマもはじめに、中村先生が言われましたが、非常に多岐にわたっておりまして、私も非常に勉強になりました。やはり、文化人類学というもとから多種多彩多様な要素を持ったものから立ち上がってきておりますので、たぶん器に収まりきらないだろうと思います。器から考えるのではなくて、中身から発想していくということがおのずと出てくるのだろうと思います。一方で永野先生がおっしゃったように、ここにはもうすでに百年の伝統があります。そういったものと、どうしても器に収まりきらないものと、この辺をどううまく調整していくか。その辺りが最終的には大きな課題になろうかなと、なんとなくそんな印象を持ちました。以上です。

上田：ありがとうございました。では宇治谷先生にお願いいたします。

宇治谷恵：宇治谷と申します。こちらの大学では、博物館各論のⅠとそれから博物館実習を担当しています。

僕が一番最初に、博物館に興味を持ったのが、皆さんと同じ学生の頃です。僕は地理学出身で、北の方をやったもんですから、アラスカの今でいうイヌイト、当時エスキモーと呼んでいましたが、興味がありました。探検部というのに入っていて、学生何人かで、調査というより遊びですね、北極海添いのバローという町からずっと、フェアバックスという所を経て、そしてブリティッシュコロンビア州までずっと約2ヶ月ほど旅行した経験があります。

そこで、何が感動したかという点、僕は無一文の生活でしたから、各大学にビジターセンターと言うのがあるんです。僕らみたいな汚い格好のものが行ってもですね、そこでお湯の出るシャワールームが使える。僕ら学生にとってはすごくありがたいことなんですよ。なかでもアラスカ大学にはビジターセンターがあり、図書館があり、そこにもユニバーシティミュージアムという博物館があるんです。そこで日本人の方がキュレーターとして働いていた。偶然行って、そこでお世話になったりしました。そこで何を展示してあったかは忘れちゃいましたけど。その印象というか、大学博物館だけでなく、ビジターセンターと言う形も含めて、それらは大学全体を紹介する場所もあったんです。それがひょっとしたら博物館好きの原因になったかもしれないし、私と博物館とはそういう縁があったわけです。

また海外の例で、今日のアメリカで言えば、博物館そのものが、展示施設から教育という面を重視している。展示と言うのがひとつの教育の世界になってる。聞いたところによると、私は実際に見たことはないんですけど、最近、博物館が学校を運営しているようです。それはやはり、物を通すなり、資料を通して学ぶことが重視されるようになったと。聞いたところによると、アメリカの大学、あるいは中学や高校でも、下手すると、日本ということすら知らないそうです。例えば地理の教育でも、アジアのことなんかあまり重要視されなくて、ヨーロッパや中東のことばかり教えていたりする。日本という国ですら知らない学生が増えているというので、それに対して反省もあって、もう一度、アメリカの博物館では、幸いにして、結構日本の資料を持っているところがあるんです。そういうものを通して教育をやりとうという試みはあるそうです。やはり実物を見ることが、日本という国を紹介する場合に重要です。それがひょっとすると、浮世絵とか袴ばかりかもしれないけれども、やっぱり物を見せないと、いくら教科書の世界で日本という国を教えても、わからないと言うんです。もちろん

間違ったイメージを与えてるかも知れませんが。

その点で、この国立民族学博物館も最近では、大学共同利用機関という、大きな上に冠が付くんですけど、大学とどういう風に連携するか。あるいは、共同利用機関ということですから、大学だけじゃない。地域や、地域の博物館とどう連携するか。いろんな議論がされている。私の場合は京都文教大学との非常勤という関係もありますし、「インド サリー展」もありましたけども。

例えば、博物館実習をどういう形で受け入れるのかということも、国立民族学博物館の中では議論されているんです。いろんな考え方がありまして、大学とどう連携を取るかというのよりも、もう少し、アジアの博物館と関わるなどを重要視されていますが、どういう形で、大学と連携するかを含めていろんな議論がされていて、方向がまだ定まっていないというのが実情です。

一方で、こちらの京都文教大学の活動を見ると、例えば、ここで50名くらいの学生さんが履修していますけれども、かといって全員が博物館の現場と連携した実習ができるわけでもない。また、そういう博物館学を勉強したからといって、博物館の学芸員になるのは少数です。なんらかの形で学生の皆さんにも貢献できる授業にするためには、どうすればいいのかなという。いまの中園先生のお話について、そういう感想を持ちました。

最後に、学園記念館のかかわりについて、これは個人的な意見ですけど。東京に、みなさん名前は聞いたことあると思いますが、田中千代さんという、民族衣装を集めた有名な方なんですけども、その方のつくった田中千代学園というのが東京の渋谷にあります。そこに立派な記念館があったんですが、10年くらい前には、学芸員の人も2人くらいいらっしゃったんですけど、いろいろ検討していくと維持できないということで、民博でなんとかならないかと言う相談があり、結局、いただいたという経緯があるんです。おそらく記念館であろうが、博物館で

あろうが、やはり作ってから10年、20年経った時にどう維持をするかということが問題です。私たちの博物館もそうですが、その問題が5年くらいで来ることもあるし、10年くらいで来る場合もある。そこを見越したような制度設計や、あるいは、はじめからあまり大掛かりなものじゃなくて、小さなものから、徐々に、30年頃に大人になるような計画性を持って作るほうがいいのかという気がしております。

上田：ありがとうございます。では、最後に杉本先生お願いします。

杉本星子：今日は、お話をうかがっていろいろ考えさせていただく、よい機会になりました。うちの大学の学芸員課程を立ち上げる時に、実習室を作りたいという構想は、当然、あったんですね。しかし、大学にそうしたお金がかかるといったら、学芸員講座自体がたたなくなる可能性があります。それで、まず講座をたててしまっ、だんだん学生さんたちが育っていき、実績をつけてゆけば、そのうちいつかは実習室を作っていただけるのではないかという夢を持ちながら、やってきたというところがあります。ただ、今日のお話をうかがっていて、夢を本当に実現させるためには、ちゃんと動かないといけない、夢だけでは駄目だなと、改めて思いました。一方またそれとは別に、永野先生のお話に出てきました学園資料館が本当にできて欲しいと思います。それとの連携で、実習室案も少しは何か形が見えてくるのだろうかという期待もあります。今、宇治谷先生に普通の教室でやっていただいている博物館学の授業に、きちんと使えるような部屋ぐらいは。とにかくそこからでも、実現できればいいかと思います。

一方ですね、幸か不幸か、最初の段階で実習室が作れなかったということもあって、いろいろな博物館の皆様にご協力いただいています。坂本先生はじめ、宇治市歴史資料館には、本当に最初の段階からご協力いただいて、本当にありがたいと思っています。そのことによって、学芸員講座が実習生をとおして外に開く機会に

なり、それがプラス面ともなって今に至っているのかなという気もしています。ですけれども、本当にそれは歴史資料館であるとか民族学博物館であるとか、皆様のご好意に甘えながら成り立っているという実状だと思います。

ところで、うちの学園の学芸員講座の一つの特徴として、博物館学芸員課程の学生の授業だけではなくて、学生が中心になってボランティアで、常に主体的にいろんなことをして、新しい活動を広げているということが挙げられます。これはうちの大学の本当にいいところなのではないかと、私は教員として誇らしく思っています。もちろん学生ですから未熟なこともあり、いろいろな問題を抱えて、多くの方々に教えていただいたりするところもあるんですけども。でも、ボランティアを募ると必ず何人か集まってくれ、また集まった学生が本気になってくれます。先ほどの中園さんのお話をうかがっていても、やはり、大学のミュージアムとほかのミュージアムの一番の違いというのは、学生の存在だと思うんですね。鹿児島国際大学の場合は実習室を作るところから、学生たちが主体的に関わっていました。それが、鹿児島国際大学ならではの博物館を作り上げることができた、ひとつの大きな原動力かと思います。うちの大学の場合は、やっぱり、これからなのだと思います。それがどういう形になるかということは別にして、学園ミュージアムを具体化していくなかで、ここにいる学生さんも含めて、どういう風に学生が関わっていけるか、本当に主体的にどこまで本気になってくれるのか、あるいは、教員たちがそういった学生をサポートしながら、彼らの作りたい博物館を実現できるように、どうやって大学側の体制を整えるかということなどですね。今日のお話を伺って、学生の力を真ん中に置いたミュージアム作りを目指すのもいいのかな、というご示唆をいただくことができたと思います。

さて、具体的にどうするかということなんですけども、これも先ほど坂本先生もおっしゃいましたように、文化人類学というなかなか既存のミュージアムの枠に当てはまらない学科です



し、外に出て行ってコミュニケーションするのが学問的にも重要な学科です。それらの特徴を生かすなら、ハードよりもソフトから出発し、そこから実績につないでいくということになるかと思っています。さきほどからちらほら出ていますが、文科省から研究費をいただいている「人と人を結ぶ地域まるごとミュージアム」構想の中では、大学がひとつの地域の情報ネットワークのひとつの核になるということを考えています。唯一ではなく、あくまでひとつのです。それがいろんな地域にあるいろいろな核をつないでいく。そういった形で、まずはバーチャル・ミュージアムでもいいのではないかなと思うのですが、その辺りから地域をつなぐ場としての、大学ミュージアムというのを作り始め、とにかく動いていこうというようなことが検討されています。

今度の5月から始まる歴史資料館の企画展「まるごと・いろいろ・たからもの」で地域まるごとミュージアム構想の活動を展示するのですが、それがたぶん次にどういう風につながっていくかを考えるための、ひとつのステップになるのではないかと思います。そういう意味で、バーチャルであって、時にはそういった特別展のような形で現れたりしながらでもいいのですが、大学と地域が連携したミュージアムをどうやって私たちが作っていくか、是非皆さんと一緒に考えていきたいし、その中では本当に学生に、自分たちが主体だというつもりで関わってもらえたらと思います。

上田：ありがとうございます。それでは、最後にお話したいと思うんですが。だいたいいくつかアイデアの骨格のようなものが出てきたように思われます。特に本学は100年からの歴史があります。永野先生がおっしゃいましたように、いろいろな資料、貴重な資料が沢山あります。それをどうするかというひとつの問題があります。それは、本当に貴重な資料で、やはりそこには箱とかそういうものが必要だと思うんですね。それをどういう形にしていくかということは、これからの問題ですが、大事ですね。

やはり、みんな本学に入ったからには見たいという、それに触れたいという思いもあると思います。

その一方で、文化人類学科という、先ほどおっしゃっていただいた、非常に多種多様で、世界のいろいろなところに行ってきて、ひとつのハコには収まらないようなものがあります。それから文化人類学の基本のフィールドワークという、人とコミュニケーションをとりながら、それぞれのいろんな文化をこちらが吸収して、そこからまた自分を見ていくという形があります。それから、大学というのは、杉本先生がおっしゃたように、学生さんは本当に力です。ただ、それは4年間なんですね、そこに何十年もいるわけでもない。その4年間を、いかに大学で力を燃やしていくかということでもあります。それをプラスにしていくということでも、一方ではバーチャル的な、何かひとつ。「あかり展」とかもありましたよね。ああいうかたちで、学生生活を燃焼させるとか、そういうことを。形がきちっとあってするというよりも、期限を限った特別展などがあるし、いろいろな形でのバーチャル的なものもできる。そういう柱を踏まえながら、ここでは本学百年の歴史と文化人類学というのを兼ね合わせたような形で、学園ミュージアムを考えたら、どういうのがイメージとしてできるか。やっぱり、実現しなければいけないけど、その実現のためには夢というのが大事なので。楽しい夢を描きながら、ここでは語りあいたいと思います。では、よろしくお願いいたします。どなたか。

永野：ちょっとすいません。一番最初に話しましたので申し訳ないんですが、学園百年の保存しなきゃいけない資料の保存責任というのは、学園本部にあるわけです。で、そのことと、地域まるごとミュージアムというのと、大学のいわゆる大学博物館って言うんですか、さっき中園先生がおっしゃった文化人類学実習的な博物館って言うんですか、そういう3つのミュージアムはそれぞれ別々で、違うと思うんですね。学園の保存しなければいけないものというのは、

これは絶対保存する責務があります。これは絶対どんな形になろうとも保存しなければならぬ。それを拡大解釈的に、もしも許されるなら、学園の資料館が学芸員課程の実習先のひとつにでもなるような資料館になればという楽しい夢というか重たい夢というか、そういう気持ちでおりますが、保存はこれは、絶対しなきゃならない。その点からいえば大学博物館とは別かもしれないというふうに思っています。

上田：ありがとうございます。先生方もいろいろご発言ください。学生さんからも。みなさん自由に語ってくださいますように。

坂本：文化人類学の先生方が海外に調査に行かれて資料を集められた時に、どこか一括して、集めるというのはあるのですか。

杉本：実はですね、大学ができてすぐ初めの何年かはですね、モノを少し集めていこうというので、予算を取りました。それぞれが調査地でモノを買ってきて、それを集めて保存していけば、いつかミュージアムができる。ユニークなものができるんじゃないかという構想があったんですが、だんだん予算規模が縮小されていきまして、まずそこから削られました。大学院を作ったときにも、資料保管室だけは作っておこうといって、部屋の一画を保管庫にしました。今、院生が収集した資料などは、そこに入っているかと思うんですけども、現実には活用されていないようです。それぞれの先生が持ってきたものが、オープンキャンパスの時にだけ、ぱっと出てきて、学生たちがアレンジして展示することしかやっていません。

上田：それと、それぞれの先生の研究室に、実にユニークな展示が。あるところでは保存していて虫がわいたとか。

杉本：システムとしては収集されていないですね。

坂本：まだ博物館は別として、資料室的なものもないんですね。

杉本：まだないですね。私たちも最初はそういう夢を持っていたんですが、現実の前について、そのままになっているところです。

上田：それから場所としてないんですよね。

杉本：学園のこれからの百年史の中には、文化人類学入っていくでしょう。今までの百年には、なかったんですけど。とするならば、何が残っていくのかという問題は、また考えなければいけないでしょう。

宇治谷：どこの大学でも、特に総合大学は自然系か文科系かで喧嘩されるところがあり、実は自然系がどこも強いんですけど、いずれにせよ学内にある資料を散逸することなく、図書館とは違う意味で、アーカイブ的なものを集めるような資料館を作り、それが博物館として発展させるというのが、ある種のユニバーシティミュージアムの流れですね。ですから、先ほど先生がおっしゃった、学園としての記念資料。これは当然保存しなければいけない。だけどそれだけじゃなくて、各先生が集められた教育資料、研究資料をどう集中的に保存するか。それを所在情報としてバーチャルでやるのかどうか。ただバーチャルだけだと、なかなかそれで求心力があるかという、ないかもしれませんけど。

杉本：例えば、短大の方ですごく気になっていることがあります。大学をつくるのに学部改変があって、短大の学部でなくなった学部があるんですけど、その被服科があった時に教育に使われていた非常に珍しいめずらしい織り機などがまだ残っています。わざわざ見学に外部から来るような貴重なものであったりするようですが、それがほこりまみれになっています。今は短大に染織の専門の今井誠志先生がいらっしゃるので使ってくださいっていますが、その先

生が退職なさったらどうなるのかなと、非常に心配でもあったりするんです。法人の方では、そういったことについて何か方針がありますか。

佐々木昭道（本学園法人事務局）：今おっしゃっていただいたことについては、具体的にかつてそれを管理していた先生とか、あるいはその当時は服飾衣装学科という学科なんですけど、それがなくなった段階で、今後残していこうという話はありません。ただ先生のおっしゃった織り機の部屋は存在しますので、一応は残っておりますが、実用もされていないでしょうし。

杉本：今年は使ったのですけど。

佐々木：そうですか。まだ使えますか。

杉本：使えます。今年は大学の方で、「手仕事のフィールドワーク」という授業で使わせていただいています。今年使わせていただいて、その財産がいかに貴重なものであるかわかりました。それから、実際に織り機がたくさんあって、糸をはるところから学べるチャンスというのは、実際ほとんどないわけですから、今回、学生たちは非常によい勉強をさせていただいたのです。で、そういうものがありながら、今井先生がおやめになったあとに、それがごみになってしまう可能性があっては・・・と思います。

佐々木：放っておくとその可能性はあります。だからそういったものは、先生方から、声を大にさせていただいて、何とか残して、さらに使っていく方向で言っていただければいいかと思います。でも短大の7号館や12号館というのは、将来的につぶされる場所でございますから、今の場所では残らないと思いますね。

上田：でももったいないですよ。

佐々木：もったいないです。

永野：余計にそうだったら、学園としても保存しなければいけないものが何で、どこに保存するかということはきちんと考えるべきです。

佐々木：そういうものを、事務の立場で言わせていただくと、早い段階から、系統立てて、何と何をこういう形で残していって、将来どのような形で維持していくか、あるいは保管していくかということを含めて、具体的に言っていたくと、じゃあそれに対してこれだけの予算をつけましょうという話はしやすいです。やはりこれはそれなりの価値がある、これは代え難いものであるということを明確に声を大にさせていただくと、動きやすいかなという感じはありますね。

上田：ほかに、学生さんたちのほうで、何かご意見やご質問は。

立石尚史（人間学研究所事務）：中園先生のお話は、最近でいうD I Y（Do it Yourself）の精神、文字通り「自分たちの創意工夫で手づくりする」ことの連続で、とても面白かったです。博物館が本当に短期間でできたということでしたが、短期間に作ったわりには、外からたくさんお客さんを招いたりとか、積極的に活動されていると思ったんですけども、そのためには広報活動があって、学生さんにその存在を周知徹底する。そしてさらに学外の人にも知らせなくてはいけないわけで、これはもともと、鹿児島国際大学にはそのような広報のルートがすでにあったのか、それとも、また今回新しくルートを開発して、広報をいかにやるかという工夫をされたところもあったのでしょうか。

中園：ああしてみると、入館者が多く見えますけども、一般の博物館と比べると、恐ろしく少ないです。学内的にも知らなかったという学生や、噂を聞きつけて来て、もっと早く知ってたら来たのに、という人がいっぱいいるんです。

ね。学部が違くとわからないとか。で、そのために学内的にはポスターセッションのポスターを廊下にわざと出したり、いろんなことをやっています。大学のホームページに出したりとか、あらゆるチャンスを捉えて、周知徹底を図っていますが、その程度なんです。良くはなっているんですが、まだまだ少ない。ただし、キャンパス見学会とかイベント事には、積極的に協力するようにしています。逆に外部で有名になってきたかもしれません。結局ですね、誰かが来ると、その人は帰って家族にしゃべりますよね。そういう形で、本当の口コミみたいなのが、原始的であるかも知れないですけど、自分の信頼する人であれば説得力があるということで、非常に効果があるのではないかとと思っています。

大学には広報センターがあるので、そういう所とも協力します。一度NHKが来てくれました。大学に博物館実習の専用の施設があると取り上げてくれて、生中継をしてくれたんですね。おそらく西日本に流れたと思うんですけど、その後しばらくは結構問い合わせがあったりしました。そういったマスコミなんかをうまく使うこともあるかもしれません。ただし、長持ちはしないですね。常に新しい情報を発信していかなければならないので、なかなか難しいですね。入館者を増やすというのは今の課題のひとつです。

中村：関西大学の大学博物館が発表された時に行きましたけども、4月はキャンパスツアーがあるので、そこだけで一年間の90%の入館者があって。あとはずっと来ないんだという。それは過去の例ですけどね。

中園：うちも二回くらいピークがあるんですけどね。あとはそんなに。

中村：今はオープンキャンパスがありますからね。その頃オープンキャンパスがなかった時代の話ですけど。

上田：そういうこともありますね。ほかにご意見ありますでしょうか。

永野：先ほど、坂本先生と宇治谷先生におっしゃっていただいて、ふと思ったんです。そして中園先生のお話聞いて。つまり、鹿児島国際大学の国際文化学部の中園先生がおられるから、あの施設ができたのですよね。ということは、京都文教大学の文化人類学科がどんなミュージアムを本当は構築できるのかということが大事なのではないかと。いわゆる、文化人類学科が博物館学芸員資格課程を売りにするんだという、本当にそこを核にするんだといえ、フィールドワークでいろんなところに行かれた先生方のそういうものをきちっと展示して、そういうものから、いろいろと学ぶための実習室というのを作るべきではないでしょうか。非常に面白いなといつも思っているながら、空中に絵を描いているような気もするなというのが、地域まるごとミュージアム構想というあの構想なんですよ。それって普通は考えない、得体の知れないというか物が無い。以前、坂本先生におっしゃっていただいてましたが、「それこそが京都文教大学の文化人類学科の構想なんだ」というのにウエイトを置くのか、どちらでやっていくのかというあたりでないと。二束の草鞋をはくというか、二兎を追っているというか、そういう気がしないでもないんですよ。私は、どちらかにウエイトをおいても、結果的には京都文教大学の文化人類学科としてのあり方を大いに活かしていけるという風に思います。どっちでも活かしていけると思うんですけどね。フィールドワークの先生方のそういうものを中心という、鹿児島国際大学の国際文化学部の中園先生ありき、で出来た貴重な事例を、我々も参考にさせていただかないといけませんね。

坂本：京都文教では誰がなるかやね。

永野：そう。誰がなるかというあたり。キーワードと共に、キーパーソンが必要だろうとい

う気がしましたね。お聞きしてて、羨ましかったですよ。中園先生、文教に来ていただいていたら、ものすごくいいもの作ってくださっただろうなという風に思ったり。

宇治谷：そこでひとついいですか。このあいだ九州で博物館の大会がありました。九州国立博物館の三輪先生が従来の博物館学を発展させて、あたらしく「博物館科学」という言葉をおっしゃっていました。やはり今後、「学」からもっとサイエンス的に見ないといけないということで私も感銘を受けたことを思い出しました。今後、考古学的な博物館よりも、バーチャルな博物館、生涯学習に対応した博物館というのも増えていくと思うんです。そういったなかで、何か新しい用語で、文化人類科学、なのかはわかりませんが、人類学だけでなく、幅広い文化をサイエンスするような、ある種のミッションみたいなものがあると、わかりやすい。僕も人類学と博物館実習をどう結びつけるかということはいろいろ実験していますが、フィールドワークという言葉はわかるんですけど、科学として考えるとなかなか難しいなあと。中園先生のお話された今回の実習については、やはり考古学の場合、サイエンスという科学のところが強いから、うまく実習生とマッチするというのがある。しかし、これと同じことを文教大学でやるわけにはいかないかなとは思っています。

上田：以上いろいろお話をお聞きになって、実際に博物館実習に関わっていらっしゃる学生さんたちのご意見はどうなんでしょうか。

中村：特に4回生は実習に行ったあとなんで。

学生（女）：お話を聞かせていただいて、中園先生の積極的な活動がすごく影響して博物館ができたものという印象を受けたんですけど、その後の引継ぎはどのように考えておられるのでしょうか。例えば先ほどもおっしゃっていましたが、30年後、50年後、100年後まで、それが

続いていって欲しいということですけども、その最初にあった勢いを、どうやって維持するのか、まだその時期ではないと思うんですけども、それはどのようにお考えでしょうか。

中園：素晴らしい質問で、感心しました。実は痛いところつかれました。私がとうとう言わなかったのに。最後の心配はそこなんです。私が育てている弟子といいますか、学生の誰かかもしれませんし、私以外にも考古学の先生はいますし、他にもスタッフがいるわけですから、そういう人たちに引き継いでいければ私も本望ですね。物とか箱というのは、古臭くなるというのは当たり前なんです。何が残るかといったら、中身は変わりながらも、人の強い思い、夢とかいうものはつながっていく可能性がありすね。中身が変わるかもしれないけど、博物館で何かしたいとか、そういう精神や学芸員魂のようなもの、そういったスピリットがつながっていったらいいんじゃないかと。

実はですね、あの施設がどうこうじゃなくて、私は要らなくなったらなくなればいいというくらいの覚悟なんです。大変な巨額の金をかけてですね、間違ったら大学が傾くかもしれないくらいの金を傾けてしまったら、すぐには壊せないかも知れないですけど、いつか駄目になったらやめてしまえばいいような気がしています。大学も博物館もどんな組織も、刻々と変わっていく環境に対応していく、あるいはそういう環境の中で生きていくというのは当然です。

博物館の大きな目的としては、資料を保存することですね。先ほどから言われているように、これは永遠に変わらないことかもしれませんが、しかし、もうひとつは博物館の性格、活動内容とか、そういうものは変わっていったら当然だと思うんですよ。ホイットニー美術館の女性の学芸員がすごいこと言っていました。そこは美術館ですから、収集しないといけないわけですね、美術史的に。その一方で、その美術館がどのように変化していくかということに責任を持つのは、自分たち学芸員の責任だというんです

ね。この美術館はこういう美術館なんだという設立の趣旨さえも、学芸員というものは責任を持って変化させることができるという、これは大変な学芸員の自信だと思うんですよ。むしろ、そんな学芸員がいてこそ博物館が生きてくるし、時代に対応できると思います。ちょっと極論だと思いますけど、箱とかいつでも壊せという気がしています。

もうひとつ、関係ないかも知れませんが、進化的に言いますと、中国文明にしろ何にしろ、文明が花開いて国家ができていく過程というのは時間がかかるわけですよ。しかし、その周辺にいた日本のようなところは、弥生時代になってから国家形成へのスピードが速いんです。そういう風に、先端を行くところというのは当然あります。それから、後からどんどん追いかけてくるところはありますが、後から始めて、抜くことは容易なんですよ。先端をギューンと行くと、もうあとは止まるしかないんですね。同じシステムを維持しようとするればするほど、で、袋小路に入っていく、という話がありました。そこへいくと、これは後進性の特権とか言う人もいますが、後から新しく始める人たちは、やり尽くされて損しているような気はするかもしれませんが、実はそうじゃなくて、全く新しい発想で、全然違うことができるんですね。さきほどから私が、禍を転じて福となすとか言っているのはそういうことであって。そういう不利な面にこそ、実は発想の原点があるような気がしています。

だから私は、これから学芸員を目指す若い人たちに言いたいのは、すごい生意気なようですが、そういう柔軟な発想でやっていただきたいというのと、学芸員は、博物館や人類の文化というものに対して、それくらいの責任を負っているんだということですね。自分たち次第でどうにでもなるという責任を負っているんだと誇りを持ってやっていただければ、もうそれはバーチャルであれ、何であれ、すばらしい博物館ができていくんじゃないかと思いますね。

何より私が驚いたのは、この京都文教大学で、これだけの先生が長いこと議論を続けてこ

られてるということ、そのことにびっくりしておりまして。それ自体が非常な財産でして、特徴であり、ウリですから、こういうことができる大学の先生や学生さん、そして、スタッフの皆さんというのは、何かとんでもないことができそうな気がします。実際すでにされてるわけですよ、ね、「地域まるごとミュージアム」とか。何かできそうな気がします。

上田：ありがとうございます。

学生（男）：今日中園先生の話聞きまして、鹿児島国際大学の国際文化学部というのは、学芸員の資格課程に重点を置かれているんですか。

中園：いろいろある中の、ひとつです。いろんな資格があるじゃないですか。教職はもとより、司書とか。そういうものの一環としてあるということですね。だからこそ、「なにくそ」といって、目立とうとしているわけです。

永野：燃える闘魂がないとあかんわけですね。

中村：さっきの学生さんが核心のところを聞いてくれて、その続きなんですけども。中園先生のお答えの中で、要らなくなったらつぶせばいいというような答えがありましたね。実はその質問とつながるんですけども。中園先生ありきというのは、私なりの解釈では、まさにそれこそバーチャルな、先生の頭の中にある構想が、具現化したものが植木鉢であったり、そういう見方を私はしたわけです。まさに教師の夢としては、自分が育てた学生が継いでくれればいいんですけども。ところが、先生の中から生まれた構想や工夫のようなものも、博物館を引き継ぐ人間も、どちらも出てこない場合は、博物館構想そのものがつぶれますね。ところが、私はあえて言いますが、物を作っておけばいい。ものは遺跡としてでも残るわけですね、校舎だけ残ったみたいな。ここのところを、先生の頭から生み出せたアイデアや工夫の結果だ

け、今回我々は見せてもらったわけですが、それに代わる後継者というのは、先生どう思われますか。もうひとつ核心なんですけども。おそらくそこがないと、次の受け継ぎができない。そこはどうでしょう。

中園：難しい。そうですね。

中村：それは逆にいいところでもあるけど、限界ですよ、頭の中が。消えてしまったら、この脳ってというのは、残っていないわけですから、どこにも出てこないわけですよ。それが先生の源泉であるならば。

中園：そのへんのアウトプットなり、ノウハウを記録しなければいけない。

中村：それを後の人が、それこそ自分なりに。あとを追うものというのは、まさに障害物競走で網を出てくるみたいな。最初の人は辛いだけで、後のものは蓄えながらずっとついて行けるという。

中園：発想の転換を根本からできる人がいれば、何でも成功していくと思うんです。そこから、文化人類学の先生を前にして言うのもあれですが、やっぱり、僕たちもすでに凝り固まっているんですよ。で、若い学生さんはいろんな意見をもってるわけですから、もっと柔軟にいろんなことをぶつけて、提案していくとか、根本から疑問を持っていけばいいですね。

中村：それはある意味で、学生の発掘ということ、学生をいかにおだてるんじゃなくて、あおってね、やわらかさを出しなさいよといってやっていく産婆役かなと思ったり。先生のされたこともそうであると思うし。わかりました、ありがとうございました。

中園：イギリスのアレクサンダー・キーラー博物館をご存知でしょうか。ストーンヘンジにある博物館です。私は行ったことないんですが、

そこで大幅な展示替えをやった。非常に安価なんです。世界的な遺跡なんですけども、日本円でほんの数百万です。お金もない、部屋も狭くて変えられないとか、いろいろ制約だらけなんです。そこで展示替えにあたって彼らが考えたのは、「何がわからないのかが、わかる展示をしよう」と。つまり子供からアンケートをとったら、「トイレはどこにあったの」とか、「男と女は一緒に暮らしてたの」とか、非常に鋭い質問をされるわけです。基本的だが難しい。そこで、そういう質問に考古学者は答えてきてなかったのではないかという反省の展示を、常設展にしたんです。むしろは教育というのは非常に重視しますから、子供が来て考えられるような展示です。例えば古代人の格好をした復元の人形に、体の半分は髪ボウボウで、髭が生えて。反対側は三つ編みをして刺青をして、綺麗な服を着て。わざと変えるんですね。下には展示パネルをわざと引き裂いてあるんですよ。そういう展示で、「さあ、どっち？」という、考えさせる展示です。しかもそれは安い値段でできる。そういうことで、従来型の博物館は全部古い博物館になっちゃったわけですよ。その話には私は感動しまして、そんなことができるのは超人的な先生か、若い学生さんしかないだろうと。だから、今ちょっと恥ずかしがっている学生さんも多いかも知れませんが、バカな意見だから恥ずかしいとか思わずに、あえて先生と議論してみるというのは、もしかしたらすごい意見が出てきて、画期的なことができるかも知れません。

上田：私は研究室に訪ねてきた学生さんたちと話す時に、「えっ！」と思うような質問を受けることがあるんですね。「先生、事実ってなんですか」とかって質問があったりして。そこで人類学における事実について何時間もみんなで議論したり。そういうことでも、質問でも意見でもいいんですよ。

学生（女）：駄目になったらやめてしまってもいいというような意見なんですけど、それは私



もすごくわかるんですね。博物館の役目っていうのは、後になっても残るものをいつまでも保ち続けようっていう気持ちが、すごい博物館には大切だと思うんです。で、中園先生の今の博物館に対する思いというのをそれ以上に博物館に残していくべきだとおもうんですね。箱はどうでもいいんですけど、そういう博物館を建てようといったその気持ちを、それこそ残すべきだと思って。

中村：そうするとバーチャルミュージアムとかね。

学生（女）：その仕事がまた教育にもつながっていくんだと思うんです。そのような引継ぎはどのように。

中園：そうですね。確かにあなたの言うとおりで。そもそもやめりゃいいとはいってますけども、でもそう簡単にやめられるかということもあります。

中村：でも、先生のご意見を逆説に取ると、作る喜びというのは、一回しかできないじゃないですか。後は維持の喜びですね。だから壊れちゃった方が次の人のほうが作るよということが出来るかもしれませんね。

中園：そういう意味では壊してもいいんだと思います。

中村：博物館を発想するという喜びを。

中園：せっかく残ってきた文化財を、捨ててしまえ、壊してしまえといっているわけじゃないんですね。そのシステムなり、箱なりを壊そうと。

学生（女）：その気持ちをどうやって残すか。

中村：構想しよう、という気持ちを。

中園：わかりませんが、それこそですね、将来、文化人類学でも考古学でも、歴史学でも、将来のことを予測するっていう時は、必ず近い過去か遠い過去か、とにかく過去のことを参考にしますよね。なので、是非、みなさんでそういう研究をしていただければ。

宇治谷：確かに私も、学生さんに教えているのは、博物館の資料というものは、そのものの心も含めて次の世代に受け継ぎ、大事に扱うということですが、一方で最近の博物館資源論という、資料論から資源論という言葉があります。資源っていうのはどういうことかといいますと、ごみでもそうですけど、結局リサイクルという考えですね。今まで僕たちがやってきたことは、博物館の資料を、現状でフリーズしていたんですね、基本的にはね。フリーズというのは、ある面言えば、次の世代にフリーズして、それをどこかでまた使う時に解凍するということ。だけど、フリーズしている間に、ひょっとしたら、その貴重な情報も、なくなる可能性もあるので、フリーズするのではなく、リサイクルする方法を考えることなのです。これを博物館資源論と呼んでるんですけど、まだ、いろんな批判を受けたりもします。

例えば「あかり工房」の資料もそうなんですけれども、坂本先生は痛んでもいいよといってくださるから、非常にありがたいんでしょうけど、その過程で、ひょっとしたらなくなるかも知れない。

中園先生は極端に、つぶれてもいい、とおっしゃっているけども、おそらく今、行っていることそのものが記録となり、形を変えた資料となり、次の世代に受け継がれていくという解釈もできます。誰がおこなうかは別として、そういうことも博物館の機能ではないかという気がします。民博でも、博物館有限論といって、今のままの博物館も必ずしも無限なのかどうかという問題も、いろいろ議論されています。

中村：賞味期限があるかもわかりませんね。

宇治谷：ある程度はそうですね。ただ、賞味期限はありますが、モノが持つ情報は何らかの形で残っていくと思います、それが壊れようが痛んだり、いろいろ変遷してもですね。ただその情報をひとつの館や場所だけで未来永遠に保つということはなかなか難しい。人による不断の努力がってこそその情報は残るのです。大英博物館とか日本の正倉院などでも、実は、時代によっては苦しい時代もあったようです。たとえば、正倉院でも、私が聞いたところによると、江戸時代は、敷地内に犬や猫が出入りしていたぐらい、苦しい時代があったようです。今でこそ奈良博の正倉院展という、多くのお客さんがいきますが、江戸時代はあまり評価されていなかったようです。だから、先生がおっしゃったような博物館には賞味期限というのがあるかも知れないです。そのためにも、その情報をどのタイミングで受け継ぐかという知恵、あるいは、計画性なり、ビジョンがないと、博物館を維持するのはなかなか大変だと思います。簡単な感想ですけども。

上田：ありがとうございます。まだいろいろお話は膨らんでいきそうなのですが。時間が迫っておりますので、「これだけは」というご意見をいくつか、お話ししていただきたいと思います。

永野：こういう言葉があるんですね、歴史を明確にするということは、将来を創ることである。つまり、クリエイトする。創り出すことであるというのが、私とっても好きな言葉なんですけども。歴史を明確にする、明らかにするって言うためには、精神と、それから、物と。物から読み取れる精神というのもあるでしょうし。そういう意味では、中園先生が不老長寿で、何千年も生きられるわけでもございませんが、物や入れ物はなくなっていても精神は残るでしょうし、そういうものから、一番最初にどういう気持ちで、何を誰が創っていったかという歴史を、きちっと明確にできるわけですからね。そこからまた新しい将来が創られてい

く。それは全く違う人であるかもしれないけれども。そういう意味では、博物館というもののもつ意味、意義というのもそういうところにもあるんじゃないかなというふうに思います。

上田：他に何かありませんか。

中村：これは思いつき、アイデアなんです。エコミュージアムと関連して、さっきの宇治谷先生が科学論って言うのをおっしゃった、文化は科学であると。で、私はいつも言うのは、コアミュージアムとサテライトの関係をシステムとしてはっきりするという。まさにコアは何もないけれども、バーチャルな世界で集まったり、いろんなことをしていくと。

例えば先ほどの話では、いろんな経験、知識、あるいは歴史的資料を集めたもの、これがサテライトであって、先生の研究なども含まれる。それをどうやってバーチャルなところでコアとして整理するのか。これは形があってもなくても、一部屋でもいいし。それは変わっていてもいいですよ、どこの部屋に何がありますよ、と。それがどういう位置づけですよということを紹介するのが、コアミュージアムの役割であっていいかなと。

それから、もうひとつは、文化人類学の話ですけども、例えば「地域まるごとミュージアム」も、やはりバーチャルだけでも、ある意味それはコアかも知れないですね。サテライトはそれぞれの場所にあって、大学もひとつかも知らないような。そういうコアとサテライトの関係性をうまく持っていく。中園先生の大学の博物館はコアミュージアムなんですよね。先生のサテライトはまさに屋久島であったりそういう風なところで学生さんが動いてる。だから、うちだったらどうなんだろうと置き換えてみれば「あかり展」であったりするかも知らない。学芸員、学生育成のなかでもですね、こんな気がして。僕は何かつながればいいのかと思います。

上田：ありがとうございます。

学生（男）：学生の立場から言うと、近くに鹿児島大学とか他の大学ありますよね。その中園先生がおられる鹿児島国際大学の学生さんで、博物館学芸員講座を取っておられる方に、他大学の学生と交流したいというような声は上がっていたんでしょうか。

中園：ないですね、お互いに。これは別に仲が悪いというわけではないんですけど、不思議と。

学生（男）：学生から声が上がらないということなんですか。

中園：はい。できないというのではなくて、そういうのをしたいというのが出てきません。むしろ、周辺の自治体の作っているような博物館と一緒にやりたいなとかいう話はあるんです。不思議と大学間というのはないですね。もしかするとそれは、大学で博物館を持っているといっても、全然性質が違うからかも知れません。鹿児島大学のもっている博物館というのはいわゆる、旧国立大の博物館構想。直接学生は関係ないですし、研究博物館といいますか、大学の研究を紹介する博物館ってことですよね。うちは実習というのがかなり重要なウェイトを占めていますので、名前は似ていますが、そういった性格の違いがあるかもしれません。

中村：今の関連で思ったのは、中園先生の大学のウリは、実はバックヤードツアーというのがものすごい人気なんですよ。テレビでいうと、ネタばらし。水族館でも海遊館が始めて、すごくバックヤードツアーが人気で、そっちだけ見に行く人がいる。だから、博物館のバックヤードツアーというのを先生のところがウリにすると、黎明館とかにも負けないし、面白いかなとも思ったりね。

中園：「こうやって作るんですか」という声は、確かにあります。

中村：あるでしょうね。生涯学習などで来られた方とか。

中園：その方向性で、ちょっとやってみます。

中村：面白いかなと思って。全然違うでしょうね、学生さんの参加意識が。

中園：それもやはりあります。見せざるを得ないっていう構造というのものもあるんですけど。そういう弱点をウリにするという。

上田：他には。はい、どうぞ。

学生（女）：学芸員を育成していくという形での、学芸員課程のなかでの博物館の役割というのも重要だと思うんですけど、それ以上に、文化人類学の博物館ができるとすれば、そこで自分が学んでいる文化人類学を改めて学びなおす機会になるという意味で非常に重要だと思うんです。それは、博物館を作っていくという過程でも、同じことだと思うんですね。オープンキャンパスが毎年夏休みにありますけれども、あれでも、規模も小さいですし、まだまだかもしれないですけど、高校生が文化人類学を見に来るじゃないですか。そういう意味では、この学校でも実践しているということで、同じように特別展みたいな形で、別の機会にも大学で企画してやったりとかは、まだできないんですかね。

杉本：いつもね、鶴飼（正樹）先生が、トラック一台あればできるとおっしゃっています。トラックにテーマに合わせていろいろなものを乗せていこうという博物館構想を考えたりしています。本当に学生たちがやろうと思うならば、実現させる方向で考えていくということもあるかと思います。今日、いろいろ伺って、記念館というもの・・・これはさっき永野先生がおっしゃいましたように、保存しなければいけないものなどはいろいろありますから・・・それから、学芸員講座というものと、地域をつなぐよ

うなものと、それぞれ全く違うんですけども、学園ミュージアム全体としては連動していくような、そうした大学ミュージアム構想が作れると、ある意味で非常に独自の新しいものができるのかなという気がします。こうしたことを、今後、少しずつやって行けたらなと、今日、改めて考えさせていただきました。

上田：そろそろ時間ですので。最後に杉本先生がまとめてくださいました。記念館という歴史のあるしっかりしたものが一方にあって、こちらに文化人類学という、多種多様なものがある。そこで、特別展とかバーチャルな展示ですね、そういうものの両方が一緒になってそれぞれが特徴を活かしながら、人類学的な発想も活かした、新しい博物館構想をこれから考えていくといいかなと思っています。その時に、最初、中園先生がおっしゃった、魂ですね。想いっていうのが出てくれば少しずつ、変わりながらも維持できるんじゃないかと思います。そういう形で、何年か後には、卒業された後、学生さんがこられて、「あ、できたんだな」というようななかでそういうのが出来ていたらいいかなというのが。これが今日の討論を終えての私の感想です。今日はどうもありがとうございました。

(了)